

## 【研究ノート】

ファウスタ・チャレンテの  
『バッラータ・レヴァンティーナ』と  
『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』の比較分析  
——ブルジョワジー表象を中心に——

古川 望

## はじめに

ファウスタ・チャレンテ Fausta Cialente (1898-1994) は1898年にイタリアのキャリアで生まれた。ユダヤ系イタリア人の株式仲買人・音楽家であった夫の実家がアレクサンドリアにあったため、1921年から1947年までエジプト（アレクサンドリアとカイロ）で暮らした。晩年に評価が高まり、イタリア文学界で優れた作家として認められるが、死後は関心が集まらなくなった。女性作家の活躍について、近年には研究が進みつつあり、チャレンテに関する研究も増えてきている。だがイタリア国内でも作家の人生経験や作品の紹介、一次資料の収集と編纂が中心である。本稿のような作品同士の詳細な比較分析はまだあまり行われていない。イタリア国外ではほとんど知られておらず、日本では研究・翻訳ともにまだ行われてない。

本稿では『バッラータ・レヴァンティーナ』(*Ballata levantina*, 1961) と『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』(*Le quattro ragazze Wieselberger*, 1976) の比較分析を行う。両作品ともチャレンテの人生経験が他の作品と比較して強

く反映されている。前者は 1961 年にストレーガ賞最終候補に選出された。後者はチャレンテが、母方の家族の経験と自身の経験を直截的に書いた作品で 1976 年にストレーガ賞を受賞した。

作家自身と、両作品の主人公や主要登場人物には多くの類似点がある。『バッラータ・レヴァンティーナ』のエジプトでの生活の描写、反ファシズム活動の描写は『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』で似た形で再度繰り返される。本稿では、チャレンテ自身や登場人物の周縁性、作品内で描かれる女性の系譜などについての先行研究を参照する。そうした頻繁に言及される特徴についてブルジョワジー表象という新たな角度から、両作品の比較分析を行う。そして 19 世紀後半から 20 世紀後半までのレヴァントとトリエステに共通するブルジョワジーの問題を、チャレンテがどのように捉えていたのかを明らかにする。それを踏まえ最終的に、チャレンテの作家としての責務について検討する。

## 1. 作品の概要

『バッラータ・レヴァンティーナ』は、イタリアにルーツを持つ主人公ダニエラの描写を中心に、19 世紀から 20 世紀にかけてのエジプト社会の様子や、エジプトから見たイタリアの様子が描かれている長編小説である。ダニエラは 1920 年代後半から 1930 年代前半にかけて、幼年期を祖母とともにアレクサンドリアで過ごした。その後カイロに移り、1941 年に失踪する。19 世紀後半のエジプトの様子はダニエラの祖母を通して描かれ、第二次世界大戦後のエジプトやイタリアの様子はリヴィア（祖母亡き後のダニエラの保護者）を通して描かれる。ダニエラはさまざまな人々の影響を受けながら、常に自分の居場所やアイデンティティを模索している。

タイトル『バッラータ・レヴァンティーナ』の「バッラータ」はリフレインが特徴的なイタリアの古民謡である。小説内ではこの古民謡のように、類似したシーンが「回帰のメカニズム *meccanismo del ritorno*」に基づき効果的に

繰り返される<sup>(1)</sup>。「レヴァント Levante」は本来「太陽が昇る地」という意味である<sup>(2)</sup>。厳密な定義はないが一般的に西ヨーロッパから見て東に位置する国々を指す地理的な呼称である<sup>(3)</sup>。多くの場合、ギリシャ、トルコ、シリア、パレスチナ、エジプトを含む地中海東岸地方を指す<sup>(4)</sup>。チャレンテの作品中でもレヴァントとはこれらの地域を指すため本稿でもこれに倣うこととする。

二つ目の小説『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』は作家の家族と作家自身についての回想録的な長編小説で四部構成である。第一部の舞台は19世紀末のトリエステであり、作家チャレンテの母方の祖父の家族、ヴィーゼルベルゲル家の様子が描かれる。チャレンテの祖父グスターヴォは音楽教師・指揮者・作曲家である。妻と四人の娘（長女アリーチェ、次女アルバ、三女アデーレ、四女エルザ）と暮らしている。グスターヴォを中心とし、家族は皆、「未回収地主義 irredentismo」を支持している<sup>(5)</sup>。1886年にアリーチェが結婚する。エルザはボローニャで歌を学び、1891年からイタリア内でオペラ歌手として活動していたが、1894年に結婚しキャリアを中断することとなった。その後ヴィーゼルベルゲル家の母と、わずか27歳であったアデーレが亡くなる。アルバは結婚をせずに、父と暮らすことを選ぶ。

第二部の舞台は、20世紀初頭である。第二部から主人公は四姉妹の末娘エルザの娘に変わる。エルザ・ヴィーゼルベルゲルはファウスタ・チャレンテの母であるため、この主人公は作家自身であるが、最後まで主人公の名前は明かされない。ファウスタ一家は、陸軍に所属していた父に伴い、イタリア北部を転々とする。毎年夏になるとヴィーゼルベルゲル家を訪れた。ファウスタ一家がパドヴァに移ると、ヴィーゼルベルゲル家との関係はより深まる。アリーチェの長女リヴィアが、トリエステの未回収地主義の中心的指導者フェリーチェ・ヴェネツィアンの息子と結婚したことにより、ヴィーゼルベルゲル家の未回収地主義への意識は一段と高まる。

第三部では、ファウスタのジェノヴァでの青春時代の様子が語られる。ア

リーチェの息子で、ファウスタの従兄弟であるファビオが、ヴィーゼルベルゲル家の未回収地主義の夢を背負い第一次世界大戦に志願する。第三部は、カポレットの敗北とファビオの死で終わる。

第四部ではファウスタの結婚後から、1956年までの出来事が語られる。ファウスタは1921年に結婚し、エジプトに移住した。1947年にイタリアに帰国し、1955年に母エルザが亡くなるまで世話をする。その後は、ブリティッシュ・カウンシルの職員と結婚した娘一家と生活をともにし各地を転々とする。物語は1956年の夏、ファウスタがペルシャ湾の海岸で娘と二人の孫娘たちと過ごす様子で締めくくられる。

## 2. 『バッラータ・レヴァンティーナ』におけるレヴァントのブルジョワジーの表象

本節では『バッラータ・レヴァンティーナ』における19世紀後半から第二次世界大戦開始前までのレヴァントのヨーロッパ系ブルジョワジーの表象について論じる。

アレクサンドリア出身のダニエラは事故で両親を早くに亡くし、1930年代前半まで母方のイタリア人祖母に育てられた。コスモポリタンなエジプト社会の中心地は、カイロとアレクサンドリアであった。特に後者には、ヨーロッパ移民による大きなコミュニティがいくつもあり、そこでは学校や病院などの施設が次々と建設され、国際都市へと発展し、エジプト経済に大きな利益をもたらした (Avallone 2012: 5-6)。祖母は、ユダヤ人大富豪の愛人という経済的立場を利用し、ブルジョワジー社会を巧みに生き抜く術を身につけていた。「男は女の人生で最も大切なものです！」(BL: 80) と、自分やダニエラのように生まれながら高い階級に属さない女性は、男性を頼る必要があると論ず。ダニエラはこれに対し「祖母の品のなさに衝撃を受けた」(BL: 80) と驚きや嫌悪感を抱いていた。

祖母はスーダン人解放奴隷である使用人ソアードに大きな信頼を寄せていた。ソアードはダニエラが幼いころは乳母代わりの存在であった。以下の引用では、祖母から便宜を得ようと寄ってくる欺瞞に満ちた「おべっか使い」のヨーロッパ系の女性よりも、ソアードが祖母と親密な関係にあったことが示されている。祖母は自分を取り巻く人について出自にはよらず、自分に利益があるかどうかで大事にするかを判断していた。

祖母とソアードの親密さは、恐ろしいほどだった。ソアードは、公の場所でもその親密さを利用した。祖母のスリッパを脱がし足を触りながら「温かいね」「冷えているよ」と気さくに声をかけることに、ある種の満足感を覚えていた。(…)そして、また、「こうしなさい、あしなさい、ハビブティ〔訳註：私の愛しい女の子。親しい間柄の女性に対して用いられる〕」と祖母に言っていた。祖母に聞こえないよう、おべっか使いの女たちに「あなたたちはもう帰りなさい」と囁くこともあった。(BL: 15)

祖母はスエズ運河開通後、踊り子としてミラノからアレクサンドリアに移住した。スエズ運河建設はエジプトの威信をかけたものであったが、建設や開通時のイベントに多額の費用がかかり、1875年にはスエズ運河株をイギリスに売却した。翌年にエジプト財政は破綻し、政治的な決断はスエズ運河の利権を有するイギリス政府に牛耳られるようになる<sup>(6)</sup>。それに対しオラービー革命が起き、混乱のなかアレクサンドリアでは大暴動が起きた<sup>(7)</sup>。泥酔したギリシャ人高利貸がロバの使用料を請求した少年を殴り、それをきっかけにエジプト人の外国人への怒りが爆発し、大暴動に発展した(山口2011: 190)。ヨーロッパ人の住居や商店が略奪、破壊されたほか、イギリス領事をはじめヨーロッパ人およそ50人が死傷した(山口2011: 190-191)。「実はその1882年の6月〔訳註：前述の暴動の際〕に、祖母も乳飲み子、つまり私の母をソアードに抱かせ、ア

レクサンドリアの港に停泊中のイギリス船に乗り込んだ」(BL: 23)。これは祖母にとって恐ろしい記憶であった。7月のアレクサンドリア砲撃後、イギリス政府はエジプト介入を本格化した。祖母の感情は「この国はどうなっていたんだろう、私たちはどうなっていたんだろう、もしイギリス人がいなければ！」(BL: 24) というものであった。祖母のようなヨーロッパ系ブルジョワジーは、自分たちが穏やかに暮らすため、エジプトがイギリスの支配下にある方が良いと考えており、植民地主義を支持していた。1882年9月にはイギリスはオラービー革命による混乱を収束することを理由に、エジプトを軍事占拠した。それから1923年までの約40年間エジプトは事実上、イギリスの植民地支配下に置かれた。小説内ではダニエラの祖母の世代のヨーロッパ系ブルジョワジー女性が、大暴動から何年経ってもエジプト人に対して恐れを抱きつづけていたことが語られる。

四十年経っても、レヴァントの家族のなかでは彼女〔訳註：祖母〕と同年代の女性の多くが、あの虐殺の記憶〔訳註：1882年の暴動のこと〕のために、先住民の使用人と家のなかで二人きりになることを避け続けた。(BL: 23)

ここまで、ダニエラの祖母の表象を中心に19世紀後半のレヴァントのヨーロッパ系ブルジョワジーの描写を検討した。アレクサンドリアの大暴動を知る祖母のようなヨーロッパ系ブルジョワジー女性は、イギリスによるエジプト人の支配を歓迎していたと語られていた。その背後には、ヨーロッパ系住民の方が非ヨーロッパ系住民よりも優れているという優越感や差別意識があると考えられる。祖母は使用人のソアードとは親密な関係を築いていたが、心のどこかでは非ヨーロッパ系住民とは、決してわかり合えないという気持ちを抱いていたといえるだろう。

祖母亡き後、マッテオとその妻がダニエラの保護者となる。マッテオはギリシャ人大富豪と、その愛人であったイタリア人の踊り子、ディアマンテの子である。ダニエラの祖母とディアマンテは似た境遇にあり、親交があったため、マッテオはダニエラを引き取った。ダニエラは若い実業家ジルベルトに誘惑され、彼に惹かれ、交際する。ダニエラがジルベルトに惹かれたのは、川で溺れ死んだ初恋の相手と同じ名前であったことがきっかけであった。ジルベルトは、レヴァント社会で生まれながらに強大な権力を持つアンジェルと男女の関係にあった。ジルベルトの恋人になったことで1935年から1939年の間に、ダニエラはレヴァントの上流社会に身を置き、アンジェルとはライバル関係になる。

マッテオはギリシャ人大富豪の私生児で、金銭的な援助により高い教育が受けられた男性であったものの、レヴァント社会のカーストに入り込めない半端な存在であった。こうした生き立ちのためにレヴァント人のモラルの欠如に敏感になり、嫌悪感を抱くようになったのであろう。彼はダニエラに、レヴァントのブルジョワジーの本質について教える。その一例として、ブルジョワジー社会で権力を獲得するため、経済力でヨーロッパ国籍や称号を購入するなどして身分を偽ることがあるとダニエラに話す。

何年も前に、一部の裕福なレヴァント人、特にユダヤ人に多かったが、彼らはさまざまな国籍を無理やり得ることに成功した。多くの場合は外国勢力に大きな貢献をしたためであった。(…)その見返りとして希望する国籍、ときには貴族の称号さえも手に入れた。(BL: 194-195)

以下の引用ではヨーロッパから持ち込まれた文化や資本はエジプト人農民には行き渡らず、エジプト内の権力者や、ヨーロッパ移民のコミュニティ内の発展を助長するだけだと述べられている。

100 年以上にわたって、コスモポリタニズムはエジプトの幸運と繁栄であると繰り返し言われてきただろう。本当はその逆だ。外国人〔訳註：スエズ運河開通に伴いエジプトに住みついたヨーロッパ人入植者たち〕はここで一儲けした。(…) 外国人の利益、パシヤの利益 …… 「責任者」の利益のためだ！ 確実にフェッラーハ〔訳註：エジプト人農民〕のためではない。(BL: 111-112)

以上の二つの引用により、レヴァントのブルジョワジーは自分の属する国への帰属意識が乏しく、自らの利益にのみ関心があり、エジプトの状況にも無関心だが、無意識的にエジプト人へ優越感や差別意識を持っているという問題をマッテオが批判的に捉えていることがわかった。さらにマッテオはアンジェルの例を示し、レヴァントのブルジョワジーは自分の属するコミュニティ内ではしか通用しない階級意識に囚われ、彼女もまた権力を保持することに執着しているとダニエラに教える。「他の居住区やコミュニティではアンジェルは底辺に位置する。努力してもきらびやかな頂上に到達することはできない」(BL: 145)。

本節では、ダニエラが人生を通して出会う、さまざまなレヴァントのヨーロッパ系ブルジョワジーの例について論じた。祖母は 19 世紀のレヴァント世界を体現した存在であった。そして、マッテオ、アンジェル、ジルベルトを通して、20 世紀前半の腐敗したレヴァントのブルジョワジー社会の様子が描かれていた。

### 3. 『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』におけるトリエステのブルジョワジーの表象

本節では、『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』における 19 世紀後半から第二次世界大戦開始前までのトリエステのイタリア系ブルジョワジーの批判的描写



について検討する。

『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』の前半は全知の語り手によるトリエステの未回収地主義批判が中心となっている。新聞記事や歴史書からの引用を用いた考察、作家の母方の祖父の家族であるヴィーゼルベルゲル家の人々が保管していた手紙の内容に加え、彼らの服装や表情、寝室の樟腦の匂いといった作家個人の記憶に基づく詳細が描写される。作家自身の資料調査に基づく分析や、私的な記憶が合わさった語りであることから、三人称の語り手は作家自身の意識を反映しているといえる。後半は一人称の語りとなり、語り手自身の人生経験が語られる。この語り手は作家自身であるが、名は最後まで明かされない。前半でも後半でも、政治的・軍事的な出来事、社会現象について語り手の考察が含まれる<sup>(8)</sup>。

トリエステの未回収地主義者はブルジョワジーがほとんどであった。語り手は、こうしたブルジョワジーのスロヴェニア人に対するまなざしと、労働者階級に対するまなざしの共通性を示している。まずスロヴェニア人については、第一章において祖父たちがスロヴェニア人を「スチャーヴィ」(奴隷)と呼んでいたという事実が語られる。このことについてチャレンテはイタリア共産党機関紙『ウニタ』に投稿した記事で、蔑むような口調に幼年期から違和感を抱いていたと述べている。

トリエステ人 [訳註：トリエステのイタリア系住民] にはスロヴェニア人を「スチャーヴィ s-ciàvi [訳註：s-ciàvo の複数形]」と呼ぶ悪い習慣があった。より正確に言えば、トリエステのブルジョワジーが、その土地で生まれたヴェネト方言もイタリア語も話さない人を「スチャーヴォ s-ciàvo」と呼ぶ。子どものころ、この言葉に嫌悪を感じ、苛立ちを覚えていた。可能な限りの侮辱を込めて、劣った人種を指し示すかのようにこの言葉が発せられていると感じたのだ。(Cialente 1953: 3)

労働者階級に対する未回収地主義者のまなざしについては、トリエステがイタリアに併合されると、彼らはイタリア国内の労働者階級には関心を向けなかったことが批判されている。

切望され「イタリアになった」町〔訳註：トリエステ〕の政治形態からは、労働者の声は排除された。新しい政治形態は自らの利益のみを重視した。自らの力と富でしか、己の価値観で作られた社会の利益を守ることはできないと考えていた。(QRW: 131)

そして、以下のように語り手は、トリエステのブルジョワジーの例だけでなく、イタリア全土には長年、差別意識や無理解や無関心という問題の積み重ねがあり、そのことがファシズムの台頭を許してしまう条件になったと指摘している。

依然として解決しない積年のスロヴェニア問題の根底には人種差別があったのに加え、「労働者」への（侮蔑的な敵意ではなくとも）無理解や無関心があった。だが、これらの 19 世紀に犯された大きな間違い——それはトリエステの未回収地主義者だけの間違いではなく、イタリア人の間違いでもあった——の重みが、悲惨な第一次世界大戦後、イタリアをファシズムに引きずり込み、トリエステをファシズムに引きずり込むことになった。(QRW: 131-132)

語り手は小説内で歴史批判と並行して、青春時代の四姉妹にも批判的なまなざしを向けている。四姉妹は両親のもとで、芸術や文化を愛するように教育を受けてきた。「彼女たちは教育を受け、結婚した姉妹もそうでない姉妹も、芸術や美、愛情を模範的に享受することによって到達する総合的なものを目指し

て、今世紀初頭まで生きてきた」(QRW: 68)。三女アデーレは原因不明の病により27歳で亡くなる。残された三姉妹は、カポレットの敗北と、それに続くファビオの死により、人生は芸術や文化では解決しない、もっと物質的で厳しいものであると知ることになる。

チャレンテの従兄弟であるファビオは第一次世界大戦で亡くなった。ファビオは四姉妹の長女アリーチェの息子である。イタリアが第一次世界大戦に参戦すると、ファビオはミラノに行き、イタリア人として偽名で入隊する。この時点でチャレンテの祖父は亡くなっていたが、ファビオの入隊は、未回収地主義に傾倒するヴィーゼルベルゲル家にとって名誉なことであった。だが1917年10月の「カポレットの敗北」の直後12月にファビオは戦死した。第一次世界大戦後にイタリアは未回収の領土の大半を回収し、トリエステも回収した。しかしカポレットでの敗北は、イタリアがまだ近代的な戦争の準備ができていないということを露呈し、世論も混乱した。熱狂的な未回収地主義者であったヴィーゼルベルゲル家の人々はカポレットの敗北での幻滅直後にファビオが亡くなり絶望的な悲しみに襲われ、あまりにも大きな代償を払いすぎたことを理解した。「トリエステの辛い運命をもう皆わかっていた。家族のなかにはそれを認めたくない者もいたが、そうした人々も含めて、もう皆わかっていることだった」(QRW: 203-204)。だが、青春時代の四姉妹たちには未来に起きる悲劇など想像もつかない。「愛や政治、そして音楽においても、人生はありのままに受け止めなければならないと知ったとき、苦い現実の一端を、ほんの一端を発見することになる。だが最悪なことはまだ起こっていなかった」(QRW: 68)。さらに語り手は大きな歴史の動きに関する考察と、四姉妹の無邪気な様子の描写を同時に示している。

歴史は、さまざまな国々の気分次第で変化していく巨大な温度計である。

一見すると、大袈裟な激情や間違った激情の間で温度が揺れ動いているよ

うに見える。しかし、もう一度よく見てみるだけで、(特に)有力者の企みと妥協、ほとんど冷笑的といえる汚らわしい、あるいは馬鹿馬鹿しい利益、残忍さ、仮面をかぶった嘘、人種差別の卑しさ、狂信主義の不寛容が見えてくる。しかし、彼女たち、姉妹にはそんなことは理解できない。厳しい教訓をすでに受けているにもかかわらず、外を眺め、遠くを眺め、まだ希望を持っているようにも見える。(QRW: 68-69)

この引用ではヴィーゼルベルゲル家のようなトリエステの未回収地主義者の強いナショナリズム思想を、一見すると他民族に直接的に危害を加えない「大袈裟な激情や間違った激情」であったと表現している。ヴィーゼルベルゲル家の人々はこれまで本節で論じてきたように、未回収地主義者の一方的な主張の裏に他の文化や民族に対する優越感が隠れていることや、そこに労働者階級に対する無関心が含まれていることには無自覚であった。そうした問題の積み重ねが、ファシズムに繋がった可能性を語り手は指摘していた。また、上記の引用では、青春を謳歌していた四姉妹に対し、周りで起きていることに無関心であった彼女たちも同罪であったと語り手は指摘している。歴史の大きな枠組みへの批判、私的な小さな空間への批判はどちらも厳しく、優越感や無関心への批判的意識に基づいている。日常的なブルジョワジーの生活と大きな歴史的枠組みの両方の描写を通し、二つを結びつけ両方に批判的なまなざしを向けている。

#### 4. 両作品における第二次世界大戦期の描写とチャレンテの実体験

本節では、前節まで論じた二つの地域への批判的な描写の分析を踏まえ、両作品における第二次世界大戦期の描写とチャレンテのエジプトでの反ファシズム活動の実体験について論じる。

先行研究で、チャレンテの反ファシズム活動と作品との関連について論じら

れているものには、Carbé (2021)・Rubini (2019) がある<sup>(9)</sup>。だがこれらの先行研究は主に日記と両作品のテキスト上の共通箇所の指摘に留まっている。本節では先行研究の指摘を踏まえ、作家の経験や思想が、それぞれの作品でどのように反映されているかを検討する。

チャレンテは1941年から1947年にかけて9冊の日記を書いた。パヴィア手稿センターに保管されている未発表の資料であり、エジプトでの政治的活動の詳細が記されている。チャレンテは1940年6月に、イギリス情報省から、イタリア語での反ファシズムのプロパガンダの仕事を任された (Rubini 2014a: 62)。その主な仕事として、イギリス情報省の運営するラジオカイロでイタリア語でのラジオ番組を担当した。1940年10月21日から1943年2月14日までの放送で、前線からの速報に加え、政治解説や戦況の詳細な分析を含むものであった (Rubini 2014a: 62)。こうした反ファシズム活動のイギリス側の目的は、イタリア内ではファシズムにより制限されている情報を発信することにより、イタリア人兵士の意識を改革し、ファシストの軍事作戦を妨害することであったが、チャレンテの目的は、ファシストとして教育されてきたイタリア人に正しい情報を伝えることであった (Rubini 2014a: 62-63)。

『バッラータ・レヴァンティーナ』の主人公ダニエラは第二次世界大戦が始まると、マッテオとリヴィア夫妻とともにカイロに移る。マッテオとダニエラはカイロのイギリス情報省に協力していた。作家チャレンテが同様にそこで働いていた時期と重なる。『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』第四部では、一人称の語り手 (チャレンテ) の反ファシズム活動の経験が記されている。

『バッラータ・レヴァンティーナ』では、反ファシズム活動の困難はマッテオを通して描かれている。彼は、反ファシズムという目的の一致によりイギリスと協力していた。

「イタリアのためにたくさんの良いことをした」ムッソリーニに、イタリ

ア人がなぜ反対の立場をとるのか、ほとんどのイギリス人は理解していない。いつもそれとなくこう言いたげだ。「私たちは当然わかっているんだ！自分たちが育てた蛇に裏切られたと。でもあなた方は？ どう説明するのでしょうか？」(BL: 261)

ここでは、ムッソリーニが蛇に例えられている。イギリスを含むヨーロッパの国々はムッソリーニの行動をただ見ているのみで、状況が悪化するまで放置し、介入しようとはしなかったということが言及されている。イギリスはソ連の共産主義を恐れ、ヒトラーやムッソリーニが歯止めをかけるよう望んでいた。ムッソリーニがいなければ、イタリアでも共産党が革命を起こすのではないかと恐れていた。そのために反ファシズム支持者の一部は共産主義者であることを隠していた。イギリス人は、マッテオたちイタリア人のそれぞれの立場を知らないため、同胞のイタリア人に敵対する状況を理解できないことが引用で示されている。

マッテオの口癖は「[訳註：在外イタリア人の] 居住区の民主主義に関する再教育 *rieducazione democratica della colonia*」(BL: 261)であった。エジプト内のイタリア人居住区がイギリスの弾圧対象となった 1940 年には、そこで暮らすイタリア人は 6 万人を超えていた (Caserta 2007: 11)。イタリアとの通商停止、エジプト在住のイタリア人の財産没収や解雇といった措置が取られ、約 8000 人のイタリア人がエジプト内の収容所に抑留された (Caserta 2007: 12)。マッテオは情報を得る手段や判断材料がなく抑留されてしまうような在外イタリア人に、民主主義とは何かを理解させ、ファシズムに疑問を抱かせる必要性を感じていた。「民主主義に関する再教育」はもともと日記内の言葉であったが、後にマッテオの台詞として用いられた (Rubini 2019: 317)。一方、レヴァント出身で多言語に精通しているダニエラはイギリス情報省で、イタリア語のラジオ放送の内容を書き取るか、もしくは英語やフランス語でラジオを

聞き、イタリア語に翻訳する仕事を請け負う。生活費を稼ぐためにこの仕事を始めただけで、政治的な思想は持っていなかった。

次に日記に関する先行研究を参照しながら『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』における作家チャレンテの実体験に基づく描写を分析する。

ヨーロッパ情勢の悪化に伴い、チャレンテの夫エンリコ・テルニの家は反ファシズム活動グループの拠点となる。「私たちの仕事は、アレクサンドリア、ポートサイド、カイロのイタリア人コミュニティのあらゆる階層に情報を届けることだった」(QRW: 213)と語られているように、レヴァントで多くの情報を得て発信することが可能であった。チャレンテは結婚によりそうしたコミュニティに属することとなった。

チャレンテはイギリスとの協力関係の難しさは「自分でも想像のつかなかったような人間に私を変えた」(QRW: 223)と振り返っている。さらに「『ちょっとしたお話を書く』ことに時間を費やす気分にもなれなかった。戦争の残酷さが、作家であることをこの世界で最も無駄なことだと思わせた」(QRW: 223)と、創作意欲をなくしていたことも明らかにしている。日記は活動の記録を書き留めておく用途のもので、個人的な経験に関する記述や心理描写がほとんど含まれていない。Rubini (2014a: 65) は日記について「知識人としての自分のアイデンティティを深く見直すことの一環として、日記は物語執筆への拒否感情を補うものであった。(…)そして物語を書くという『当たり障りのない』行為とは一見対立する言葉の使い方や知性の使い方がなされている」と指摘している。だがその後、日記の記録をもとに両作品を執筆し、さらに登場人物の心理描写を通し、自らが感じていた反ファシズム活動に伴う困難や苦しさを表現した。

どこにも定住することのなかったチャレンテは1984年のインタビューで「イタリア人であると感じたことはない。それは私の生まれに少し関係があることで、これまでの人生にも少し関係があること」(Petrignani 1984: 85)と語っ

た。また、「私の作品のほとんどすべての重要なテーマである無神経な、もしくは罪深いブルジョワジーの姿」(Cialente 1976d: IX) が短編集『室内の人物像』(*Interno con figure*, 1976) にも現れていると、その序文で述べている。Rubini (2020: 326) は「故郷喪失 *dispatrio*」のテーマは、彼女の小説の根幹をなすもので、作家個人が世界と自分の関係を見る際のフィルターの役割を果たしていると指摘している。周縁に位置するという意識に加え、「罪深いブルジョワジー」に属しているという意識は、マッテオと語り手チャレンテに反映されていた。イギリスと協力することでしかファシズム政権下のイタリアを救うことができないという、イタリアに対する屈折した愛情と責任感が、彼らを通して表現されていた。

## 5. 女性の系譜と記憶の継承

本節では、ブルジョワジー社会の女性の系譜と記憶の継承に関する両作品の共通点を論じ、チャレンテの作家としての責務について検討する。

両作品において女性の表象の割合は男性の割合より多い。「『バッラータ・レヴァンティーナ』には男性登場人物も多く登場するが、彼らの描写は物語内での現在の状況においてのみである。一方、女性登場人物の多くは、過去から現在に至るまでの人生について語られる傾向にある」(Parsani 1984: 77)。「ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹」では、男性登場人物の名は呼ばれず、夫、兄、叔父といった呼称で表される。祖父グスターヴォと従兄弟ファビオのみ名が呼ばれる。そして両作品のエピローグでは女性の系譜が強調されている。

『バッラータ・レヴァンティーナ』のダニエラは、1941年6月22日のドイツ軍のソ連侵攻の翌日に失踪する。事故か自殺かは不明だが、ナイル川に飲み込まれたのだらうと母代わりのリヴィアは考え、真相は明かされないまま小説は終わる。幼年期のダニエラは祖母の教えにより、スエズ運河開通に伴う文化的な高揚の名残りのある、19世紀の優雅で洗練されたレヴァント社会に惹か



れる。青年期にはジルベルトの恋人になり、20世紀のレヴァント社会の内部に入り込み華やかな世界に魅力を感じる。だが一方で、19世紀から20世紀にかけてのレヴァントのブルジョワジーの持つ優越感や差別意識に嫌悪感も抱いていた。また、マッテオを通しレヴァント社会の政治的な問題を学ぶが、その意味を自分なりに解釈できず、レヴァント社会に居場所を見つけれないまま失踪した。また、ダニエラは、レヴァントのブルジョワジー社会を生きる3人の女性モデルのどれにも当てはまらなかった。祖母は男性に頼って生きていた。リヴィアは、祖母のように男性の力に頼ることを嫌い、密輸業で成功していて、夫には頼らず自らの意思で決めた道を自信を持って進む女性であった。アンジェルは社会的地位に固執していた。リヴィアはダニエラの失踪後、悲しみのなか波の上に「きらめく闇 *oscurità sfavillante*」(BL: 308)を見つける。リヴィアは、(女性としてブルジョワジー社会で生きる方法を確立できないまま失踪した)ダニエラの記憶を引き継ぐ存在といえる。

『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』の語り手チャレンテはペルシャ湾の浜辺で孫娘たちを追いかけながら、四姉妹のなかで最後に亡くなった母エルザから「できるだけ間違いのないように生きることを考えなさい。私たちは多くの間違いを犯しました」(QRW: 257)というメッセージを受け取る。孫娘たちまで三世代続くイメージにより、自らの女性の系譜を認識し水面に「かすかな光 *barlume*」(QRW: 257)を見出す。Rubini (2023: 187)も『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』の「かすかな光」は、『パッラータ・レヴァンティーナ』の「きらめく闇」を借用した波の上の光のイメージであると指摘しているように、二つの作品のエピローグは明らかに類似している<sup>(10)</sup>。

チャレンテは短編集序文で「自分の生きた時代の証言以上を書こうとは思わない(不幸にも、すでに述べた通り、私たちは有毒で残酷な時代を生きなければならなかった)。これは当然、語り手がそれぞれのやり方で取り組むべき、逃れられない責務だ」(Cialente 1976d: XVII-XVIII)と述べている。また、

『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』に関して、1986年のインタビューで「自分の家族や人生について語ったら、ほかに語るべきことは何も残らないだろう。(…)ただ書きたいと、内面の書きたいという欲求に応えるため、喜びのために書いてきた。だがこの最後の作品だけは苦痛を伴った<sup>(11)</sup>」と振り返っている。

『バッラータ・レヴァンティーナ』のマッテオとダニエラは作家の実体験を反映した登場人物であるが、チャレンテは男性であるマッテオの方に自らの思想を直接的に反映させていた。1976年のインタビューでそれまでの作品について、「どこに間違いなくファウスタ・チャレンテの伝記的だといえる部分を探し当てられますか?」という質問に「ほとんど常に男性登場人物のなかです。『クレオパトラの中庭』(*Cortile a Cleopatra*, 1936)のマルコや、『バッラータ・レヴァンティーナ』のマッテオのなかに私自身をたくさん見出せます」と答えている(Cialente 1976d: 24)。『バッラータ・レヴァンティーナ』のダニエラの最後の恋人エンツォも反ファシズム活動に携わっていた。エンツォは戦後のミラノを題材にした『とても寒い冬』(*Un inverno freddissimo*, 1966)に再登場する。この小説ではエンツォのイタリアやエジプトに対する歴史的・政治的な考察が示される。だが最後の小説『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』においては、「語り手-主人公」として自らが政治的発言を行い、時代の「証言」となった。

本稿での分析を通し、以下の二点が浮かび上がった。第一に、両作品で描かれていた二つの地域のブルジョワジーには、正反対ともいえる特徴が見られるが、どちらの作品も、ブルジョワジーの差別意識や優越感の問題が批判的に描かれているという点では共通している。レヴァントのブルジョワジーは自らの属する国への帰属意識が薄く、オーストリア=ハンガリー帝国統治下のトリエステのブルジョワジー(未回収地主義者)はイタリアへの帰属意識が強いことが指摘されていた。だが、『バッラータ・レヴァンティーナ』では、非ヨーロッパ系住民に対するレヴァントのブルジョワジーの差別意識や優越感、『ヴィー

『ゼルベルゲル家の四姉妹』ではスラヴ系や労働者に対するトリエステのブルジョワジーの差別意識や優越感が批判的に描かれていた。

第二に、両作品を分析したことにより、歴史と作家自身の関係性の描き方の変化が確認できた。1961年の『バッラータ・レヴァンティーナ』に比べ、1976年の最後の長編小説『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』ではブルジョワジーの罪の問題と、自分自身の問題との繋がりがより直接的に描かれている。『バッラータ・レヴァンティーナ』では男性であるマッテオに政治思想を反映させていた。それに対して、『ヴィーゼルベルゲル家の四姉妹』では自身が政治的発言を引き受け、自らの教養を育んだ四姉妹にまつわる記憶を批判的に振り返り作品にしている。そして自身の系譜のなかにも後のファシズムや人種主義に繋がるブルジョワジーの罪の記憶が存在することを認めた。チャレンテ自身が罪深いブルジョワジーの歴史のなかにいることを自覚し、自らがブルジョワジーとしてその証言者となる責任を負ったといえるだろう。

#### 【付記】

本研究は日本学術振興会科学研究費・特別研究員奨励費（研究代表者：古川望）「20世紀イタリアの女性作家による戦争やレジスタンス経験の表象」（課題番号：23KJ0845）の研究成果の一つである。

#### 注

- (1) 「回帰のメカニズム」の詳しい構造についてはRubini（2019: 277-279）を参照。
- (2) Cfr. *Lo Zingarelli 2019, Vocabolario della lingua italiana*, a cura di M. Cannella et al., Zanichelli [参照日：2023/09/21]（デジタル辞典（iOS版アプリ））。
- (3) Ibid.
- (4) Cfr. *Dizionario della lingua italiana del Corriere della sera*, Edizione online tratta da il Sabatini Coletti: <https://dizionari.corriere.it> [参照日：2023/09/21]。
- (5) 1861年にイタリアは統一されるが、オーストリア＝ハンガリー帝国領内には、イタリア系の人々が多く住む地域「未回収のイタリア」が残っていた。未回収地主義者は、トリエステを含むそれらの地域がイタリアに併合されることを望んでいた。

- (6) 近現代エジプト史については村田（1982）、山口（2011）を参照。スエズ運河の利権を巡る問題については酒井（2012）も参照した。
- (7) オラービー革命（1879-1882）はエジプトの農民出身の陸軍大佐アフマド・オラービーが起こした革命である。イギリス・フランスの経済的支配や政治的干渉に反発し、立憲政治の実現を要求して革命を試みた。しかしイギリス軍によって鎮圧された。エジプト最初の民族運動・反植民地運動である。
- (8) 近現代イタリア史については北原（2008）、北村（2012）、ダガン（2005）を参照。トリエステの未回収地主義については濱口（2017）を参照。
- (9) その他、チャレンテの反ファシズム活動については、以下の文献を参照した。ラジオカイロでの活動の詳細についてはBabini（2018）・Palieri（2018）・Rubini（2016）を参照。日記（未発表）の詳しい記述内容や日記とともに保管されている資料についてはCarbé（2021）・Rubini（2014a,b）を参照。Carbé（2021）・Rubini（2022）では反ファシズム活動がチャレンテの政治思想の形成の基盤として機能していることが言及されている。
- (10) チャレンテ作品では「水」が象徴的な役割を果たす。その意味についてRubini（2019: 460）は「現実と過去の歴史の間の内面的な投影」、「人生と物語の間の境界」を表していると指摘している。Parsani（1984）、Rubini（2023）、Mazzuccoの『ヴァーゼルベルゲル家の四姉妹』序文（Cialente（2021））にもほぼ同様の指摘がある。またParsani（1984: 66）は、チャレンテの作品において登場人物が「水に帰る」[ex: 川や海で溺れて死ぬ、もしくは水際で失踪する。小説の最後に水辺を歩く]という描写は、チャレンテが無意識のうちに抱いている、ラカンの母体回帰説に通ずる願望であると解釈している。
- (11) Cfr. フランス語原文：*Le monde*, [https://www.lemonde.fr/archives/article/1986/11/29/un-automne-italien-fausta-cialente-la-memoire-et-l-oubli\\_3116570\\_1819218.html](https://www.lemonde.fr/archives/article/1986/11/29/un-automne-italien-fausta-cialente-la-memoire-et-l-oubli_3116570_1819218.html) [参照日：2023/09/21]。この箇所についてはPaoli（2014: 186）の論文で引用されているイタリア語訳を参照しながら日本語訳を作成した。

### 【テキスト及び略号】

Cialente F.

1953 *Impressioni triestine di F. Cialente. Case della pace*, in «l'Unità», 30 luglio, 3.

1961 *Fausta Cialente: ho taciuto per un quarto di secolo, intervista di A. Chiesa*, in «Paese Sera», 14 gennaio.

1968 *Ballata levantina*, Milano, Feltrinelli.

- 1976a *Un inverno freddissimo*, Milano, Feltrinelli.  
1976b *Interno con figure*, Riuniti, Roma.  
1976c *Le quattro ragazze Wieselberger*, Milano, Mondadori.  
1976d *È una Camilla diversa da quella che ho immaginato, intervista di Giuseppe Bocconetti*, in «Radiocorriere Tv», 9-15 maggio, 22-26.  
2004 *Cortile a Cleopatra*, con prefazione di E. Cecchi (1953) e F. Cordell (2004), Milano, Baldini Castoldi Dalai.  
2018 *Le quattro ragazze Wieselberger*, con prefazione di M. Mazzucco, Milano, La Tartaruga.

BL *Ballata levantina* (1968)

QRW *Le quattro ragazze Wieselberger* (1976)

#### 【邦文引用参考文献】

北原敦編

2008 『新版世界各国史 15——イタリア史』、山川出版社。

北村暁夫ほか編著

2012 『近代イタリアの歴史——16世紀から現代まで』、ミネルヴァ書房。

酒井傳六

1976 『スエズ運河』、新潮社。

ダガン C.

2005 『ケンブリッジ版世界各国史——イタリアの歴史』河野肇訳、創土社。

濱口忠大

2017 「トリエステの未回収地主義と参戦運動」『日伊文化研究』、(55)、40-52。

村田良平

1982 『中東という世界』、世界の動き社。

山口直彦

2011 『エジプト近現代（新版）——ムハンマド・アリー朝成立からムバーラク政権崩壊まで』、明石書店。

#### 【欧文引用参考文献】

Avallone L.

2012 *Egitto moderno, una storia di diversità. Il modello europeo e la società cosmo-*

- polita*, in «Kervan», n. 15, 5-32.
- Babini V. P.
- 2018 *Parole armate. Le grandi scrittrici del Novecento italiano tra Resistenza ed emancipazione*, Milano, La Tartaruga.
- Carbé E.
- 2021 *La scrittura necessaria: il diario di guerra di Fausta Cialente*, Roma, Artemide. Caserta A.
- 2007 *Storia politica internamento*, in Anpie Associazione nazionale proitaliani d'Egitto (a cura di), *Gli italiani d'Egitto nella seconda guerra mondiale*, Roma, Anpie, 9-18.
- Palieri M S.
- 2018 *Radio Cairo. L'avventurosa vita di Fausta Cialente in Egitto*, Roma, Donzelli.
- Parsani M A., De Giovanni N.
- 1984 *Femminile a confronto. Tre realtà della narrativa italiana contemporanea: Alba de Céspedes, Fausta Cialente, Gianna Manzini*, Manduria, Lacaíta, 65-89.
- Paoli F.
- 2014 *Realtà storica e radici familiari. Le quattro ragazze Wieselberger*, in «Bollettino di italianistica», (2), 183-201.
- Petrignani S., Cialnte F.
- 1984 *Straniera dappertutto*, in S. Petrignani (a cura di), *Le signore della scrittura. Interviste*, Milano, La Tartaruga, 83-89.
- Rubini F.
- 2014a *Diario di guerra (1941-47) di Fausta Cialente. La memoria e il racconto*, in «Bollettino di italianistica», (1), 61-83.
- 2014b *Middle East di Fausta Cialente*, in «Bollettino di italianistica», (1), 139-152.
- 2016 «Un'italiana che parlava agli italiani». *Fausta Cialente redattrice di Radio Cairo*, in «Italia contemporanea», (281), 57-81.
- 2019 *Fausta Cialente. La memoria e il romanzo*, Milano, Mondadori.
- 2020 *Scrivere l'altrove. Forme del dispatrio nella narrativa di Fausta Cialente*, in C. Pisani (a cura di), *Scritture del dispatrio. Atti del XX Convegno Internazionale della MOD (Potenza, 14-16 giugno 2018)*, Pisa, Edizioni ETS, 325-337.
- 2022 «Un tempo velenoso e feroce». *Fausta Cialente, le guerre e la memoria del Novecento*, in P. Gabrielli et al. (a cura di), *Donne e guerra. Problemi, biografie, sguardi*, Soveria Mannelli, Rubbettino, 165-180.

2023 «Un'oscurità sfavillante». *Le quattro ragazze Wieselberger e il romanzo di Fausta Cialente*, in B. Alfonzetti et al. (a cura di), *Per un nuovo canone del Novecento letterario italiano. I. Le Narratrici*, Atti del Convegno internazionale del Gruppo di ricerca AdI (Associazione degli Italianisti) «Studi delle donne nella letteratura italiana», (Su piattaforma online, 15-16 dicembre 2021), Roma, AdI editore, 181-190.

<https://www.italianisti.it/publicazioni/atti-di-congresso/per-un-nuovo-canone-narratrici/2023%20Le%20narratrici%20AdI.pdf> [参照日：2023/09/21].